

先日うちの子のクラスのお母さん方と初めて懇親会を行いました（普通の言い方だと飲み会ですか…）（^^）/。若くて綺麗な奥様ばかりで男性陣はタジタジ（^^;）。女性は飲めないと考えるのはもう古いんですね（-_-;）。

発行元：大町デリバリーサービス松尾新聞店

発行枚数：2600部

発行日：不定期 宅配されています 信濃毎日新聞・朝日新聞・毎日新聞・産経新聞・大糸タイムスといっしょにお届けしております。

大町巡拝の旅 『仁科三十三番札所めぐり ⑪』

第11回目の『仁科三十三番札所めぐり』、十九番札所の牛立（薬師寺）、三番札所の妙喜庵、五番札所の大年寺の紹介。

<十九番札所 牛立（薬師寺） うしたて >



『 我ねがい みつの車の 牛立や
法得てひろき 道にあそばん 』

牛立山薬師寺は大町市社・松崎にある。牛立の名前の由来は、静御前が奥州にいる夫の源義経を訪ね、牛に乗りここまで来た際、疲れて突然座り込み歩けなくなった牛に、「牛や立て、牛や立て」と静御前が声をかけ励ましたのが牛立山の山号の由来といわれる。また、館之内の仁科氏の居館からみて、丑の方角にある館の意味だとも言われています。入り口から観音像の立ち並ぶ参道を歩いて寺に近づくのは風情があって気分が良いです。春日ノ御作で静御前の守本尊だったという本尊は、明治39年の火災で焼失してしまった。現在の建物も、薬師如来もその後の新作です。また、この堂は昭和39年に寺格を得て、曹洞宗牛立山薬師寺となりました。寺の後ろには、静御前の墓といわれている、勧融院静円妙止大師、文治五巳酉年九月二十三日と刻まれた墓碑がある。真正のものであるかどうかは定かではない。

<三番札所 妙喜庵 みょうきあん >

『 笑みのまゆ 開くさととりも 此の寺の
たえなる法の 花にこそ見れ 』

妙喜庵は現在九日町の東の通りに、東向き的小さなお堂となっています。駅前通りの大谷書店さんの南を東に入る道が妙喜庵大門です。記録には、霊松寺の末寺として、ちょっとした規模の寺であったと記されている。寺の開創の時期はわからないが、仁科氏の時代にはこの地は一族か家臣の居館であったため、仁科氏の滅亡後に開創された寺だとされている。また、他の寺記には、妙喜庵は仁科氏縁類の女性によって開かれた、霊松寺の隠居寺であったと記されている。明治の廃仏毀釈によってこの寺も廃寺となった。おそらくは建物などは取り壊されてしまったであろうが、向拝に取り付けられていた振り返り獅子が、現在池田町滝沢の長福寺に保存されている。本尊の釈迦如来は「運慶」の作とも伝えられる。



<五番札所 大年寺 だいねんじ >



『 三千歳（みちとせ）の 末ともいはじ
御仏の 法の齢の 計なければ 』

大年寺は天正寺の末寺で、大町市堀六日町にあった寺でした。ここは扇状地の末端段丘上に営まれた仁科氏時代の居館跡で、その西堀のかたわらを南北に通っている道を関殿小路というところをみると、この居館は仁科氏の重臣であった関氏の屋敷であった可能性がある。いまでも町名として「高見」や「堀」が残っている。高見の城ともいわれ、天正寺居館の見張りの施設でもあったようである。明治の廃仏毀釈によって、この寺も廃寺となり、僧たちは還俗したのであるが、寺の仏像などはどう処理されたかは一切不明である。寺跡から出土した地藏菩薩の石像が、北堀跡の市道沿いに祀られており、如来形石仏が大町市文化財センター玄関脇にある。

新聞に載らない内緒話！

<街角で、猫を拾った>

猫を拾った。

商店街の坂道、店先の段ボールの中に、雑貨とともに横倒しになっていた。折からの夕日を真っ向はね返す黄金色で、右足（右手？）で空へ手招きをしていた。

招き猫、である。

見渡すと「閉店御礼」の張り紙が中華料理屋の店先に張り出されている。なるほど店じまいでお払い箱になったわけだ。

「百万両」の札を首から提げていた。可哀相に、おもわず抱き上げホコリを払うと、ちゃりんちゃりと小銭が鳴った。

家人が猫好きで最盛期？ に5匹の猫がいた。最初の猫は近所の独り住まいの老女が高齢者施設に入ることになり、引き取った。「しいたけ」という奇妙な名前で、長く棲みついたが家人が入浴中に、椅子の上で眠るように亡くなった。老衰と思われた。

2匹目は庭に迷い込んできた。「リョウヘイ」と、娘が人気アイドルの名前を付けたが、ある日突然死した。獣医に診せると「心臓まひですかね。突然の…。死んだ本人がビクビクしているんじゃないでしょうか」と言った。

3匹目は体重7キロという巨大猫だが、ある日急に足取りがおぼつかなくなり、獣医に診せると「どうも結石のようですね。持病でしょう」というご託宣であった。

4匹目は真っ黒で、警戒心が強く、家人にしかつかない。先天的な猫エイズを患っているそうだ。

5匹目は雨の夜、知り合いの、コンビニの自動ドアの前でうずくまっていた。まだ生まれたばかりのようで、手のひらに乗るような小ささで、右目が少々不自由だった。だから「メメ」と名付けて可愛がっていたが、今年6月のある日、フイといなくなった。

先日、阿久悠さんの著書「犬猫太平記」を読んでいたらこんな歌にぶつかった。

「立ちわかれ いなばの山の峯に生（お）ふる まつとし聞かば いま帰り来む」

百人一首・中納言行平の歌で、猫がいなくなったときに呼び戻すための呪文（じゅもん）だそうだ。というわけで、毎朝仏壇に向かいながら、最後にこの呪文を唱えている。

でも、猫は帰ってこない。

拾った、黄金色の招き猫は玄関の、げた箱の上に据えた。右手を挙げたそれは友を呼ぶのか、金運を招くのか。

出来れば迷い猫の消息を教えてもらいたい。

大町北小 11/19 P T Aバザー開催



先日の11月19日 金曜日、大町北小学校でPTA主催のバザーが開催され賑わいました。各家庭からバザーへの出品を募集し様々な商品が集められ、開催日前夜はPTA役員さんや各クラスの正副委員長さんらによって商品への値段つけ作業と陳列作業が行われ当日を迎えました。当日は 授業参観や学級PTAが行われ、バザーはその後の開催となりました。開始時刻前には すでに長蛇の列ができあがり大盛況となりました。5年生が作ったもち米をはじめ、野菜・ドーナツ・おやき・花・お菓子・家庭から出品された様々な商品が次から次と売れていきました。五年生の「もち米安いよ～」「僕たちの作ったお米だよ～」の元気のいい声が体育館に響き渡りバザーを盛り上げていました。



川村二郎の人間万歳

<筑紫哲也さん>筑紫哲也先輩をはじめて間近に見たのは、僕が朝日新聞福岡総務局から有楽町の東京本社に異動になった1970年の春だった。本社に挨拶をして

銀ブラするつもりで、カミさんと一緒だった。本社の正面玄関で筑紫さんとすれ違った。敏腕記者にありがちなギラギラした感じがしない。身のこなしがスマートで、花があった。カミさんは『朝日新聞社にもあんな素敵な方がいらっしゃるのねえ』といいながら、数奇橋交差点の方に歩いていく筑紫さんの後ろ姿を目で追っていた。先輩と親しく口をきくようになったのは、筑紫さんが『朝日ジャーナル』の編集長になってからだ。そのころ我が『週刊朝日』と『朝日ジャーナル』は同じ八階で、両編集部の間にはついたても間仕切もなく、隣り合っていた。隣を見ていると、昼ごろに筑紫さんはニコニコしながら風のように現れる。そして、いつの間にかいなくなっている。編集部員が姿を消した編集長をポケットベルで呼び出す。筑紫さんのポケットベルは机の引き出しで鳴っていることが多かった。席にいない編集長として有名だったが、「新人類」とか「若者たちの神々」とか、造語の名人だった。評論家の立花隆さんにロッキード裁判を傍聴してもらい、雑誌に長期連載するなどという大胆な企画は、筑紫さんが編集長でなければ出来なかったろう。テレビの人になってからは、音楽会で顔を合わせることが多かった。超の付く有名人になってからも、気さくに相手をしてくれた。心はいつも活字の世界にあった。

(有) 大町デリバリーサービス松尾新聞店

大町市大町2675-7 (ハローワーク大町すぐ近く!)

電話: フリーダイヤル 0120-030553

FAX 0261-22-8402

HPアドレス : <http://shimbun.web.fc2.com/>

